

特 241

748

古谷栄一著

10

日・独・伊同盟の日迫る

ソ連を倒す道

2



* 0009838000 *

0009838-000

特 241-748

戦はずしてソ聯を倒す道

古谷栄一・著

亜細亜出版社

昭和 13

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著
第67条の規定に基づき、平成12年
付けで文化庁長官の裁定を受け使用する

日・独・伊同盟の日迫る

一 耳弁を倒す道

單はずして

特 241

748

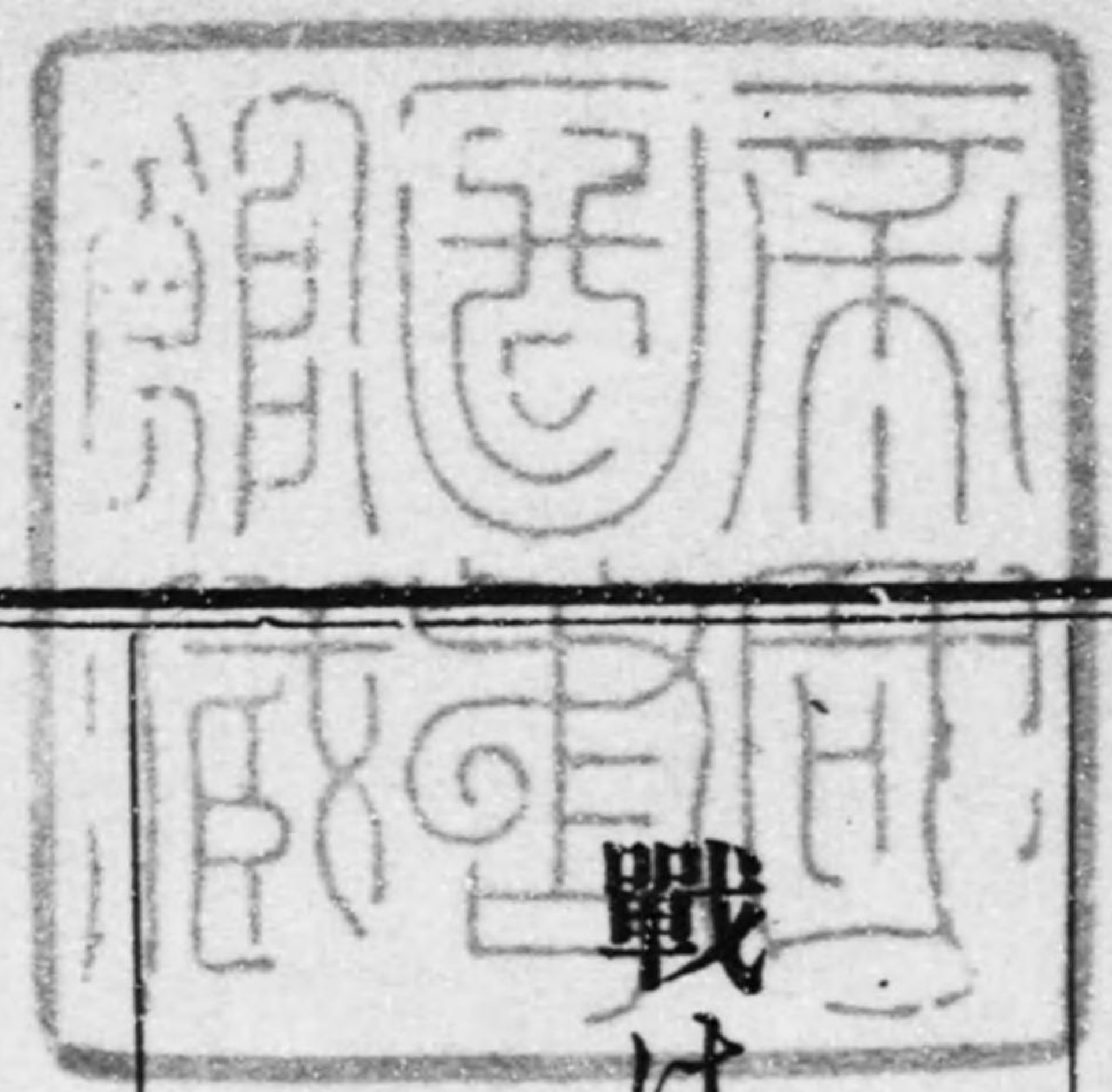
古谷栄一著

10 ㊦

38
39

145

特241
748



古谷榮一著

戦はずしてソ聯を倒す道

(日獨伊同盟の日迫る)



東京 亞細亞出版社版

— 目 次 —

- (1) 露英佛は日本の必敵……………(五)
- (2) 英國の最大目的は防共協定崩壊……………(七)
- (3) 高等政治の痲痺せる日本……………(八)
- (4) 英佛露征服の道……………(一〇)
- (5) 猶太財閥打倒の道……………(三)
- (6) 三國同盟を結ばずして漫りに露を討つ勿れ……………(二六)
- (7) ブリュッヘルを獨立せしめよ……………(一九)
- (8) ブリュッヘルを助ける代償……………(二四)
- (9) 獨立ブリュッヘルが第二の敵にならぬか……………(二六)
- (10) 停戦協定後のブリュッヘルの反轉……………(二七)

四

(11) 結盟に對する障害……………(三)

(12) 吾が經濟的實力を理解せしめよ……………(三四)

(13) 結盟は漢口陥落以後……………(三五)

(14) 功利的結盟を排す……………(三九)

(15) 三國同盟の勢力範圍……………(四)

(16) 空前の道義結盟……………(四七)

(17) 宇垣外相退却す可し……………(四九)

戦はずしてソ聯を倒す道

(日獨伊同盟の日迫る)

古 谷 榮 一

(1) 露英佛は日本の必敵

東亞の時局は漸く本筋に入らむとしてゐる。刹那的には一張一弛、進むが如く退くが如く、誠に局外からは俄かに揣摩を許さず、憶測を容れぬが如く見えるが、要するに大なる戦争への波動に過ぎない。即ち漢口攻略迄は序幕であつて、自信に充てる國民は一向に緊張しなかつたが、今や吾々は老若男女、全國民を擧つて、嚴肅なる覺悟を爲す可き時が來た様である。殊に日本は第一、第三の敵によつて、更に、より偉大なる戦争を挑まれつゝあるかの如く見える。そうして此の次に來るものこそは世界戦國時代の本舞臺でなくてはならない。そうして又、その世界大戦を吾が日本に挑み來る第一敵は赤色露西亞であらう。

私は前々から先輩先覺の驕尾についで、

『ソ聯の守備の堅固にならぬ内に、ソ聯討つ可し』
との旨を主張し來つた。特に

『支那を討つより先に、ソ聯を討つ可し』

との意見であつたが、運命は日本をして、ソ聯より先に支那を征伐せしめたが、之れは日本としては余り好ましい事ではない。と云ふわけは、若しソ聯と英佛とを挫きさへすれば、支那を今日
の如く荒廢させずに、それこそ南京攻略丈けで降参させ得た筈だからである。

だが、運命はそれを許さなかつた。乃で、次善の方策としては、南京陥落と同時に、ソ聯に續いて英佛を何とかす可きであつたのである。

今日一般に人々は、

『兎に角、漢口を陥れたらどうかなる』
と思つてゐるが、勿論、少しはどうにかなるだらうが、苟も露英佛三國を倒さぬ限り、時局は絶

對に解決するものではないのである。

乃で中には日本と英國と握手させるなぞと馬鹿な事を考へてゐるものがあるらしいが、日本が

廣東を支配せぬ限り、必ず英國は

『二股膏藥によつて日本を翻弄すると云ふ立場を取るに相違なく、然も最後に日本の疲勞を待つて復讐する』

と云ふのがその奥の手で、斷じて日本と誠意的に握手するものではない。勿論漢口が陥れば英支の連絡は一大打撃を受けるが、まだ、廣西を介して奥地支那に連つてゐる。その英國は決して日本
の全的味方になる筈がない。英國はその大領土崩解の斷末魔迄日本の敵として止るであらう。
然も、日支事變の一元兎たるその英國を對手に「援蔣中止の嚴談」と號して英國利權尊重の細目
交渉をするなぞとは誠に百害あつて一益なき外交である。かくて害惡の尤も大なるものは防共協
定に龜裂の入る事である。結局親英外交は賣國外交になる危険が多分にある。

(2) 英佛露の最大目的は防共協定崩壊

兎に角、英佛露及び猶太財閥の最大目的は日本と獨伊三國との防共協定關係を割く事にある。
そうして、その爲めにはあらゆる工作を怠らない。例へば先般の英國の對伊修好條約の側面目的
は之れにあつたと云はれる。

然らば、日本の最大目的は此の逆、即ち日獨伊三國攻守同盟を結ぶ事にある。遺憾乍ら日本には之に反対してゐる暗黙の力が隠れてゐる。それは一口に「親英派」即ち「現状維持派」「自由主義者」「民主主義者」などと云はれる連中である。分析すると之等の中にも色々あるが、兎に角、今日は斯う云ふのが一番判り易いと思ふ。そうして、之等の輩が意外な處に迄食込んでゐる。

それ故之れは有志が猛然立つて、之れ等の排斥を行ふと共に、眞に熱心に三國同盟實現に努力するに非ずんば、容易に之は實現しないのである。私は之れは向ふ一年の間に實現しなければ、實現しないと思ふ。日本が獨で戦つて、疲勞した擧句に、三國同盟を結ばうなどと云つても獨逸や伊太利が對手にする筈がない。然らば吾々は愚圖々々しては居られないのである。漫然拱手して隱敵に致さる可き時ではない。若し進んで運命の主人公とならずんば即ち其奴隸となるだらう。

(3) 高等政治の癱痺せる日本

本來日本は高等政治高等外交に於いては極めて弛緩的癱痺的である。所詮、日本は軍國であつて、政治の國でも、外交の國でもないかの如く見える。

即ちロシアの如きは浦鹽の大防備の完成しない内に討つ可く、その機會と理由はいくらでもあ

つたのであるが、遂にその勇斷に出づる事が出来なかつたのである。

此れは日本の政治家に勇斷達識の士がなかつたからである。

又、支那の如きも、此の前の上海事變で手を焼いたのに、一向、それによつて警戒するでもなく、更に眼前に支那の再戦大準備を見詰め乍ら、如何ともせず、それこそ曠日彌久、遂に今回の如き難局に陥るに至つた。之れも日本の高等政策が癱痺的弛緩的な證據である。恰も

「禍根は二葉にして刈らざる可からず」

との諺すら知れる政治家が居なかつたかの如く、それ程迄に彼れ等は優柔不斷であつたのである。いざ戦ふとなると、疾風の如き戦績を上げるが、その間が、いつでも躊躇逡巡、又いつでも戦争を仕掛けられて、不用意に立上ると云ふ體たらくである。不用意に立上るから、上海事變に於いても、今度の事變に於いても、勝勢であり乍ら思ふ様な戦果を得る事が出来ない。

但し辰丸事件以來の排日行爲を見乍ら、恰も今日の事を豫見しなかつたかの如く、然く、吾が政府當局外交當路は無爲無策であつたのだから仕方がないとも云へやう。

今や日支事變も一年を経過して、日本と云へども、長期應戦の用意を必要として來た。だが之れは徒に、長期應戦の準備をする計りでは面白くない。茲で何か長期戦争と、その準備以外に、

素晴らしい即決政策、壓倒外交を用ふ可き時である。云ひ古した言葉だが、孫子の所謂「戦はずして勝つ」と云ふ言葉は時には尊い眞理となる。漫然長期應戦を考へるのは智慧のない至りである。今迄の癡痺政策、無能政治、無爲外交を償つて余りある様な乾坤掀翻底の大活策を行ふ可き時である。只軍隊の勝利を指を啣へて見てゐる時ではない。

(4) 英佛露征服の道

外交拱手、政治無爲、徒に今日の儘戦つて行けば、日本はどうしても露英佛三國と戦つて彼等を征伏して行かなくてはならぬ。勿論之れは出来る。だが戦つた後、東亞經營の余力が残るか。残らずとすれば、そこ迄戦ふのは考へ物である。乃で戦はずして彼等を征伏する道があれば、それに越した事はなからう。戦争も二年三年に渉るものは決して好い事計りではない。『縣軍長驅、日久しふして利ある事なし』とは古今の公理である。乃ち、そう云ふ羽目に陥らざらんが爲めには三國攻守同盟を締結して此の三國の力で、位取りで露英佛支を壓倒するのが一番の得策である。之れが戦はずして敵を屈するの捷徑であり、秘策である。今日之を措いて最上の方策は存在しない。連戦連勝し乍ら英佛露に侮られてゐる日本が彼等を倒退三千里ならしむる道は之れだ。

若し斯うしなければ獨逸伊太利と云へども、果して何處迄、日本の味方となつてくれるか、大なる疑問である。今日の如き微温的協定では、此先きどうなるか判らぬのである。處が、三國同盟が成立すれば、世界の小國を皆此の三大強國に風靡して了ふ。世界大戦になつても英佛側に付く小國は澤山はあるまい。かくて大英帝國の如きも佛露と共に孤立して自然に分裂して了ふだらう。英國は戦はずして印度迄退却する事は明白である。又そうすれば、佛蘭西などはあの大陸を自分で維持出来なくなる。東洋でも日本の鼻息を伺ふより外はなくなる。アメリカも兩米大陸モンロー主義が維持出来なくなる。之は南米大陸に三國同盟に参加するものが生ずるからである。然もそれより先きに日本の兩敵ロシアと支那が迅速に崩解するだらう。

誠に只々此の三國の軍事同盟の締結を以て、一片の紙上の調印を以て、之れ等三國が世界の大強國となり、他の強國は、徒らに豪富と領土とを持ち乍ら、寸兵を動かす餘地すらなくして、自然に一切の覇權を此の三大國に委ねて没落し去るの結果となるのである。

即ち戦争する努力に比べて、何千億々万分之一の小努力によつて、血と鐵による勝利に劣らぬ大々的効果を得る此同盟こそは今日刻下の大活計で、之れを怠る事程馬鹿げた事は存在しないのである。一二年すると猶太系民主國の大包圍陣が完成して日獨伊を經濟的に征服するだらう。

或は三國同盟は反動を誘發すると云ふものがある。勿論、それは覺悟す可しである。だが、逆め覺悟すれば、そんなものは無雜作に蹂躪する事が出来る。假りにその反動の現れは英佛露の同盟だらうが、此の微力な露西亞と同盟する馬鹿もあるまいし、結局、英佛が米國を誘ふて眩鐵砲を食つて、果然自失する位の處が落ちである。

(5) 猶太財閥打倒の道

此の時、猶太財閥が盛んに黄金の融通をもつて、貧乏な日本と伊太利を誘ふだらう。彼れ等の之れは「黄金戰術」と云はれて、ルーマニヤ、土耳其、葡萄牙なども、一時的親英に傾いてゐるが、日伊兩國は決して之れに乗つてはならぬ。三國同盟は之れ等巨商雄貨のなし能はざる底の偉大な事を爲し遂げるからである。然も彼れ等の誘の手に乗れば、巧みに彼れ等の黄金に愚弄され、遂に彼等の食物となるであらう。之れは火を睹るよりも明らかである。が、日本には此の災禍を豫見出来ぬ没分曉漢の多いのは驚く可きで、更に之れを知り乍ら此の黄金餌を迎へむとするものゝあるのは悲しむ可き事である。

即ち、三國同盟の効益たるや、前述の大事業を爲すに止まらず、更に猶太財閥と堅く結托せるヲ聯を倒すと共に、猶太財閥の商權財權通信網を世界の各處に於いて寸斷して手も足も出なくするからである。今日恐る可き金色夜叉として吾等に迫りつゝある猶太財閥打倒の秘策は三國同盟より外に何ものも存在しない。又之等三國各個にとつて、猶太財閥程の苦が手はない。丸で影法師の如く、遠くに隠れてゐて、然も常に之れ等の貧乏國を財政的に打倒しやうとして、百方術策を凝してゐる彼れ等黄金魔を打倒するには、どうしても三國同盟の力に依らなくてはならない。今回日本が、支那に於いて猶太財閥に痛撃を與へたのは、日本として僅かに其の序曲であり、又之れは猶太財閥の東洋挽歌であつて、將來各地に於いて猶太財閥は三國同盟の力によつて手を毫がれ足を撈がれて、最後に没落する段取りとなるのである。

若し猶太財閥が十億なり二十億なりの金を日本や伊太利などの貧乏國に貸そうなどと云つて來ても、決して、又、斷じて借りてはならぬ。借りた時の損害は計り知る可からざるものがある。中には、

「金は無生物である。それ丈けの用意を持つて借りる分には猶太財閥と雖も何の恐るゝ處かあらん」

なぞと吞氣な事を云ふものがあるが、此の人已でに内心猶太財閥に對して寛容なる精神を持て

る愚人である。来る可き日本の偉大なる世界的地位を洞観豫見し得ざる没分曉の徒である。」
即ち彼れ等財閥の融通の目的は、

(一) 三國の人心を自然に中傷離間相疑はしめる事によつて防共協定を去勢する事、
(二) 融通によつて大な交換的利益を得むとする事、

(三) その黄金網を中心として、負債國に繊細微妙なる魔手を及ぼさむとする事、

(四) 特に其の財政的急所に食込んで、彼れを財政的に彼れ等の支配下に置かむとする事である、即ち若し、三國の内の一ヶ國でもが、猶太財閥の融通を受けるならば、それは彼れ等の爲めにその國が各個支配される事である。否、各個撃破される事である。何となれば、残された各二國の力では如何に努力しても彼れ等を打倒する事は至難である。結局財政的に敗れる危険が多分にある。之れに反して三國連合の力なら必ず彼れ等を打倒出来る。

即ち三國同盟が英佛露を崩壊せしめて彼れ等の領土を支配し、世界に君臨する時に、猶太財閥は遂に英佛米等の各國に分離的に躑躅する事になる。あの巨大な財閥網通信網が寸断される時に彼等の富は今日の如き偉大な働きをする事が出来ない。實に政權と財權とは循環的なもので、其の勢力を各地に分割されて、本部をアメリカ一ヶ國內に逐込められた猶太財閥の力は大したもの

ではなく、又その曉の三國同盟の大財力は無雜作に黄金争覇に於いてさへも、猶太財閥を打倒して彼れ等を素裸にさせる事が出来る。今日彼れ等が吾れ等に爲さんとする黄金挑戦を他日彼れ等に逆施して、彼れ等に止めを刺すものは實に三國同盟の力でなくてはならぬ。若し三國同盟が成立しないならば、恐らく猶太財閥が世界を一時的にも財政的に征服して了ふかもしれない。實にそう云ふ結果に陥らざらんが爲めに三國同盟を必要とするのである。多寡が歐洲戦争以後、世界に頭角を現した成金民族の裸の財力位は三國同盟の大國力を以つてすれば無雜作に破れるのである。早い話が此の三國のもてる國家の全經濟力と國內の人間力の總和と、大國土を持たざる猶太財閥の黄金と流離の人間力の總和とを比較して見るが好い。太陽と月程の相違ではないか。然も此の三國は聯合して偉大なる反猶經濟プロックを形成して、爾余の防共國家群を經濟的に指導するのである。そうすれば英佛露米等の半猶太國內からも吾等に呼應するものが立つ筈である。

猶太財閥の勢力なぞ問題にならぬではないか。返すくも、吾々は猶太財閥が三國の亡國的親英者流を其の走狗として、國內の上下を誑しに来る事を妨げなくてはならぬ。若し之れを許すならば、實に容易ならざる不幸を日獨伊三國の上に齎すであらう。
誠○に○三○國○を○其○の○難○局○よ○り○救○ふ○も○の○は○三○國○相○互○で○あ○る○。

(6) 三國同盟を結ばずして漫りに露を討つ勿れ

かくて、三國軍事同盟の迫力は必ずソビエト聯邦内部に強い崩壊作用を起さずには居ない。即ち西方ではソ聯の隣國が自然に獨逸の衛星となるし、内部に獨逸の觸手が入つてスターリン政權を痺れさせて了ふ。トハチエフスキー元帥等が獨逸と關係があると云ふ説を否定するものが多いが、然し前後の事情からして、關係ありとする方が正しくはなからうか。

兎に角防共協定成立と共に強く動搖を始めたスターリン政權は同盟成立と共に時の問題となる。例の鮮血の肅清によつて、人々の云ふが如く、彼の地位が強化されるかも知れぬが、それと共にその反動作用が強くなつて行く事を忘れてはならぬ。スターリンの肅清はヒットラー總統やムツソリーニ氏の血の肅清と一緒にならぬ。かくてスターリン肅清の反作用は目下密かに、そうして確實に獨逸と結んでゐる。只機會を窺つてゐるに過ぎない。チエツコ問題はその準備に過ぎない。従つてソ聯は今や其の聯邦組織の籠が西方から弛み始めたと思はれてゐる。かくて獨逸が三國同盟を結ぶ時は、之の籠は新同盟の迫力、威力に感應した丈けでハチ切れる筈である。誠に肅清工作の激しさは、偏へに此の籠の弛みに刺戟され、脅かされてゐるからである。將に大なる破

局の豫感に壓えての病的變質民族の氣狂沙汰なのである。即ち肅清が進めば進む程、人心は大破局に向つて疾走しつゝあると云ふのが現状である。

其餘波は東洋にも波及して來て居る。即ちソ聯は極東に於ても、今日スターリン派、非スターリン派、互に睨み合つてゐる。自分の腹心を銃殺され、コムミツサールに嚴重に監視されてゐるブリユツヘルと虐殺者スターリンとが互に狐疑して、少しも融和せず、相互に暗殺を恐れてゐる有様である。かくてブリユツヘルは如何にしてスターリンの羈絆を脱して獨立せむかに腐心してゐる。之れは絶えず放送されて、衆知の事實である。

然も日本が此方で猛虎一撃の態勢で狙つて居るので、中々獨立する事も出来ない。つまり彼れは日本とスターリンとの兩敵双仇の間に狭まつて深刻に苦悶してゐるのである。

乃で、之の死點脱の奸活計として、彼れは日本に挑戰する事に依つて自己の地位を堅めむとしてゐる。即ち日本との挑戰のドサクサ紛れに自己の權力を樹立しやうと云ふ誠に輕業師の様な事を企てゝゐると云ふのが消息通の一致せる見方で、思ふにリュシコフ脱出大將もそう云ふ見方を裏書きしてゐるらしい。つまり日本と戦へば、勝つても、負けても對日戰爭に對する『國土防禦の戰爭』といふ意味で、彼れの命令系統の統一が確立されるからである。

かくて日本が軽々しくブリュッヘルの挑戦に應じて正直に立つてはならぬ理由は茲にある。決して漢口攻略前だからではない。或は日本がブリュッヘルと戦ふ余力がないからでもない。そう云ふ外國電報の見方は凡べて皮相的である。日本の力は余る程待機してゐる。

眞實の處。日本としては今ブリュッヘルを敗つた處で、ザバイカル軍管區に第二段の勢力として、比較的スターリンの信用ある兵團が控へてゐる。即ちザバイカル以西に於いて、ソ聯を兵力で破るのは多少面倒で、たとへ破つた處で、日本はその時は相當兵力を消耗すると見なくてはならぬ。然も、ブリュッヘルを敗るのはスターリンの爲めに其の強敵を破つてやる事になつて、スターリンは大した痛痒を感じず、或はスターリン政權の強化を感謝するかも知れず、日本としては此の點大變割の悪い立場にある。それだからこそ日本はソ聯の蠢動に應じなかつたのだ。

又他日は知らず、今日に於いて、奥地西比利亞の如き大曠野、バイカル以東丈で滿洲の六七倍もある荒蕪の地に於ける勝利は犠牲の割に、現在としては頗る報はれない性質のものである。

つまり英獨の狙つてゐるのは、日本が斯う云ふ醉狂な事をやつた此の時である。即ち、日本の空しき疲勞を狙つてゐるのである。支那で疲れなかつたなら、露西亞征服によつて必ず疲れると彼等は睨んでゐる。勿論、日露再戦は歐洲の大動亂になるかも知れない。彼れ等は此の事を悉く

怖れてはゐるが、それにも拘らず對露戦で日本の疲勞困憊を願つてゐると云ふのが實狀である。

そう考へると、日本がブリュッヘルの極東軍を討つて之れを倒すのは、決して戰術的に戰略的に策の得たるものではない。只日本の頼む處はロシアを叩付ければ直ぐにロシアが崩壊すると云ふ點にある。勿論豫想通り崩壊するが、それにしても、モスコの中心が直に崩壊してくれねば矢張戦線が宏大な部面に擴つて厄介此の上なしである。狭い處へ大兵を出すは何でもないが、漢口からシベリヤの奥地迄戦線を擴げて、有終の美を齎すと云ふ事は、何としても只皇軍が強いからと云ふ丈けで出来る藝當ではない。内外蒙を超える丈けでも大變なのに露西亞の奥と來たら、支那とは比較にならぬ程深い。そこで彼れ等もゲリラ戦をやる覺悟でゐるのだから、日本單獨の兵力そのもので彼れ等を徹底的に勦滅する事は現在には問題にならぬ。

如かず、此の時こそ政略と外交とを併せ用ふる時である。即ち熱頭を冷却して照顧一番する時である。

(7) フリュッヘルを獨立せしめよ

先づその前に彼我の氣持をハッキリさせるが好い。

日本が一番困るのは、ソ聯が浦鹽沿海州に防備を嚴にして、何時でも東京襲撃の態勢を取つてゐる事である。

それに次いで、新京奉天等滿洲都市襲撃、日本海に於ける潜水艦による海路襲撃の態勢を取つてゐる事である。

その外にも色々困る事はあるが、強いて問題とするには足らぬ。兎に角、此の故にこそ、日本は一日も早く浦鹽と沿海州とを日本の領土とし度いと云ふ事になるのである。之れは日本の全熱望だが、然し、今日領土に飽満し切つてゐる日本は、現在としては必しも浦鹽や沿海州を日本の領土にする事を必要としてはゐない。たとへ領土にしても、日本の移民は中支南支にのみ澤山押かけて或る特殊の人達より外はあんな寒い處へは中々行つて呉れない。

特に支那の領土を占領して以來、日本人の領土に對する氣持は、急轉直下に變化した。つまり日本は領土に食傷し出したのだ。

『そんなに一偏に領土許り占領しても困るぢやないか』

と云ふ氣持になつてゐる。蔣介石は日本が支那の領土を『鯨吞して今に喉へ悶へて困るだらう』と旨い事を云つてゐるが、支那一ヶ國なら困らぬが、露西亞迄では一寸困るだらう。一應支那を消

化してからでないともづい。

即ち現在の處では、ソ聯が浦鹽沿海州滿洲國境から防備を撤廢しさえすれば、日本はソ聯と戦ふ必要はないのである。

勿論尙一方に於いて、ソ聯と日本とは黄河を隔て、山西、陝西で相對峙してゐる。之れは直接の様な間接の様な頗る變な關係にある。だが日本としては目下黄河を越えて陝西省迄兵を進めるのも、餘り有難い事ぢやない。と云ふのは、それより先きに、攻略する處が澤山あり過ぎて困つてゐるのだ。

かう考へると、此の點、日本としては、たとへソ聯と戦つて樂に勝つてさへも後始末に一寸困る立場にある。それなら何とか平和的に浦鹽等から武装を解除させる方法は無いか。

處で、ソ聯となると、目下日本と争ひ度くも争へないのは衆知の如くである。ブリユツヘル個人も日本と争ひ度くはない。だが、日本が早晚彼れを倒さむとして睨んでゐる。然も一方では彼れはスターリンと對立してゐる。スターリンは機會さへあればブリユツヘルを斃さむとしてゐる。彼がブリユツヘルを生かして置くのは對日敗戦の罪を背負はせる爲だぞと云ふデマもある位で之れでは、ブリユツヘルならずとも死物狂にならざるを得ない。乃で、政略上、彼は正面の第一

敵たる日本と事を興し度いと云ふ丈で、張鼓峰事件を惹起したのであるが、そんな事で戦争を起しても、好い結果にならぬ事は判り切つてゐる。只彼れは彼れの死點脱の苦肉策を對日戦に求めてゐるに過ぎない。彼れの苦肉策は「重光リトヴィノフ停戦協定」に依つて無理に押へられて了つたが、又數句ならずして、何處にか同一の事件が勃發するに相違ない。何等の工作なき限り度々そうやつて小競合を繰返してゐる内には大戦争になる可能性が充分にある。之れの参考として「東日」八月十二日夕刊所載「兩巨頭の溝深刻」なる題下に巴里同社特電が載せこある。即ち引用するに、

「ブリュッセルは、ソ、ヴ、イ、エ、ト、國內、に、お、け、る、地、位、を、強、化、す、る、た、め、張、鼓、峰、事、件、を、利、用、せ、ん、と、し、中、央、の、意、向、に、反、し、て、強、硬、策、を、と、ら、ん、と、し、た、が、ウ、オ、ロ、シ、ー、ロ、フ、國、防、相、は、歐、洲、の、形、勢、を、重、大、視、し、ス、タ、ー、リ、ン、を、動、か、し、て、プ、リ、ユ、ツ、ヘ、ル、を、押、へ、る、方、針、に、出、で、プ、リ、ユ、ツ、ヘ、ル、の、親、友、で、あ、る、フ、エ、ヂ、コ、國、防、次、官、を、極、東、に、派、遣、し、た、わ、け、だ、が、ウ、オ、ロ、シ、ー、ロ、フ、プ、リ、ユ、ツ、ヘ、ル、の、對、立、は、い、よ、く、激、化、す、る、の、で、は、な、い、か、と、さ、れ、て、ゐ、る、し、か、し、て、極、東、に、腰、を、据、ゑ、た、プ、リ、ユ、ツ、ヘ、ル、の、地、位、は、頗、る、強、固、で、動、か、し、難、く、こ、れ、に、反、し、て、ウ、オ、ロ、シ、ー、ロ、フ、は、革、命、前、か、ら、の、古、い、黨、員、と、し、て、ス、タ、ー、リ、ン、の、信、頼、を、集、め、て、は、ゐ、る、が、軍、部、内、に、對、す、る、威、信、衰、へ、彼、れ、の、後、任、と、し、て、す、で、に、フ、エ、ヂ、コ、次、官、の、就、任、が、内、定、し、て、ゐ、る、と、の、説、さ、へ、傳、へ、ら、れ、ス、タ、ー、リ、ン、が、軍、部、の、不、評、を、押、切、つ、て、舊、友、で、あ、る、ウ、オ、ロ、シ、ー、

ロフをどこまでかばひ得るか注目されてゐる。」

右電報は僅かに其の一例でブリュッセルに關する限りは凡ての消息が茲に一致してゐる。ソ聯の様な國では一度疑はれた人間は其疑惑を肯定して、先手を打つより外はないのである。ブリュッセルの苦悶や察す可きものがある。即ちブリュッセルの獨立意志は確定的と見る事が出来る。然らば日本はブリュッセルにその死點脱の大活計を別の方法で行はしめたらどうだ。即ち茲で思ひ切つて、日本は、彼れが極東で獨立し度がつてゐるのだから、その便宜を計つたらどうだらう。乃で日本が彼れの獨立の後を突かぬ事が判れば、彼れは必ず獨立する。そうしてからスターリンと戦端を開かせるが好い。そうすれば昨日の敵は今日の友である。即ち彼れは日本と積極的に親睦し、そうして日本の軍事經濟の助力を得ると云ふ事にしたら好からう。日本は敵のスターリンの爲めにブリュッセルを倒して、スターリンと直接に相對峙するよりも、ブリュッセルにスターリンを倒さして、極東西比利亞を日本の善隣とする方が現在に於いて尤も賢い方法だらう。どうせ、彼の主義などは好い加減なものらしいので、獨立と同時に其の國情に即した政體を立てさせれば、日本は吾が要求と交換に彼と公然握手出来るだらう。併しいくら吾々が號呼しても、支那の反蔣將領と握手して、中華民國を崩解させる事の出来なかつた日本に果して之が出来るかど

うか心許ないものである。だが其時には彼を日本黨にする方法がある。それは次に説くだろう。或はブリュツヘルとスターリンと分袂すると、スターリンの政權は一時禍根を分離して持直すかも知れない。それはソ聯が日本と間接國となる場合、日本にとつて必ずしも現在より悪い事ではない。だがそう云ふ事を考へる必要はない。スターリン政權は必ず崩壊するに極まつてゐる。

(8) ブリュツヘルを助ける代償

日本はブリュツヘルを助ける代りに、その代償として彼れに浦鹽及び沿海州、樺太、滿洲國境の全防備の撤回を要求する。勿論、吾も滿洲國も北境の防備を撤回するは當然である。そうして浦鹽の潜水艦丈は日本が皆買取つて浦鹽を明朗な對日貿易港にすると云ふ事にしたらどうだ。ブリュツヘルが獨立するには浦鹽を貿易港にしない限り不可能である。否、日本と親睦せぬ限り軍事的には勿論、經濟的にも獨立不可能である。

其の他色々利權の問題もあるが、比較的小問題で云ふに足らぬ。

そうして日本とブリュツヘルと獨逸と東西南三方からソ聯を挾撃すれば、スターリンと陝西の赤色政權は没落する。

そうすれば、日本は多くの將兵に働らずしてソ聯の問題を解決する事が出来る。

それだから此の際日本が無暗にブリュツヘルと戦つて、その結果、スターリンとブリュツヘルと握手、仲直りさせる事になぞしてはならないのである。

又たとへ戦争によつてブリュツヘルとスターリンを花々しく叩きつけるにしても、日本が疲れては何もならぬ。次の強敵が待機してゐるからだ。それ故三國同盟を成立させる迄は斷じて日本は疲れてはならぬ。即ちロシアと戦つてはならぬ、と云ふ事になる。

處でブリュツヘルにその決心をさせるには日本の勸説丈けでは不充分である。彼れ等は蔣介石同様、今に日本は財政的に弱るかと思つてゐる。或は思はされてゐる。乃で彼等をして翻然として決斷せしむるものは外でもない。即ち日本が三國攻守同盟を結べば、ブリュツヘルは必ずソ聯の前途に絶望して日本と握手し、三國同盟の衛星となるに相違ない。否、外電一閃、忽ち露西亞全土が崩壊するだろう。又そうすれば、陝西の共產軍も力を失ふし、廣東廣西も獨立するし、蔣政府の如きは忽ち腰を抜かすし、肝腎の英佛の如きは、もう蔣政府を助けるなぞと下らぬ道樂をやつてはゐられないのに心付く。彼れ等が東洋から手を引かぬのは、一向、三國同盟成立の様子が見えす、日本が今に獨りで戦つて獨りで疲れると思つてゐるからである。兎に角、日本の當面

してゐる難局は支那を人形にしてゐる三大國が、支那を犠牲にして日本を疲らせる事にあるのだから、日本も今迄の様に馬鹿正直に戦争計りしてはゐられない。茲で戦争以上の智慧を揮はなくてはならぬ。即ちスターリンが支那共産黨を傀儡にしてゐるから、日本もブリュツヘルを傀儡にして對抗するより外はない。ブリュツヘルの獨立は即ち支那共産軍とソ聯との關係に大打撃となるので、少くも共産軍は國民政府を助けるなぞと云ふ餘裕はなく、自己保全に汲々たるに至らう。

(9) 獨立ブリュツヘルが第二の敵にならぬか

或はブリュヘルが、更にシベリヤの主となつたら、第二のスターリン、或は第二のソ聯となりはせぬか？

大丈夫である。浦鹽をその息の穴としてゐる寒國シベリヤは日本の保護によつて始めて立ち得るので、日本の保護なくんば、經濟的に立ち得ない國である。又日本に數々の利權を與へなければ新しい國を創立出来ない。あの三十餘萬の大兵を養へない。シベリヤの大富源は日本の力であれば逆も開拓出来ないのである。トハチエフスキーの理想であつた『極東軍三十餘萬自給自足』と云ふ事は日本の力で、極東が開拓されてからの事である。

然らばブリュツヘルがシベリヤで獨立するのは日本にとつて非常に好都合だと思ふ。即ち日本はブリュツヘルに消極的な助力を爲すに止まらず、彼れが獨立の時にはその内争に備へる爲め、積極的に兵を出して、彼れの獨立を助く可きである。露西亞の様な國では、一方が獨立する時に外部から力を貸すと云ふ事は何等、その助力を受けるものの迷惑にはならぬ様だ。スターリンがブリュツヘルと相對峙する時は日本が内外蒙陝西を経て、中央アジアからソ聯の横を衝く事は當然である。

或はブリュツヘル、其の他がスターリンを亡してソ聯の主となる日が來たら如何？

そうしたら又大きなものになるだらうが、それは先きの先きである。假りに、そうなつても、沿海州と浦鹽の防備が撤廢してある以上、恐るゝに足らぬ。若しその防備を再建すれば、日本は電光石火、直ちに此の地點を占領して敵の死命を制するから問題はないのである。

(10) 停戰協定後のブリュツヘルの反轉

張鼓峰事件は停戰協定によつて一先づ落付くものと見られてゐる。之れは日本に事を擴大する意志がなかつたからにもよるが、

(一) ブリュツヘルの積極主義は獨立主義の伏線である事が判つてゐるので、中央の壓力が挑戦責任者のブリュツヘルに強く加はつた事、

(二) 日本軍が少數としては意外に手強く、到底輕々しく挑戦しても如何ともなし得ぬ事、

(三) 然も日本はブリュツヘルに對して積極的に攻撃する意志なきを認識した事、

(四) 英佛の輿論が日ソ戦争を反對した事、

此の數項の事情よりして、ブリュツヘルは、積極主義をもう一度再考する餘地のある事を覺つて、彼れは中央の命令に服従したのであるが、若し日本軍が脆弱だつたならば、必ず彼れは全線に向つて進撃の命令を下した筈で、それによつて有無を云はさず、全ソ聯を引摺ると共に、彼れの命令權をシベリヤに確立し、尋で獨立しやうと云ふ大野心があつたと云はれる。

今度の張鼓峰事件について、ブリュツヘルの立場を樂觀的に見てゐるものがある。即ち八月十日四日夕刊『報知新聞』の『日本外交の勝利・日ソ停戦と壽府の各紙』の項に曰く、

『(ジュネーヴ發同盟)ジュネーヴ各紙は張鼓峰事件を重視しその刻々の情報に相當紙面を割き成行を注視して來たが、十二日各紙は一齊に停戦協定の成立及び實行を慶賀し安堵の色を示してゐる、十二日クーリエ・ド・ジュネーヴ紙はその論說において停戦協定が成立に至る經過を叙し、

要するにこの事件は相互に眞底から戦争を始め考へはなく、そのために兩者の犠牲は僅少であつた。今度の事件で英雄になつたのは極東に廿五萬の精兵を有し實際上モスコから獨立の勢力を有するブリュツヘル將軍である。スターリンも極東における和戰の鍵を彼に奪はれて居り云々と論じてゐる。』

反對に伊太利官邊ではブ大將に付き悲觀的な觀察を下してゐる。「讀賣新聞」八月十一日號には左の如く出てゐる。即ち『ブ元帥の政治的生命、愈々終焉か』(ローマ特電十日發)の項に曰く、

『滿ソ國境紛争は依然ローマ言論界政界の注意の焦點となつてゐるがソ聯の態度如何に關しては歐洲一部の悲觀論にも拘らずイタリー官邊では依然樂觀的觀測が多く、(略)事實上シベリヤ方面の主權者に等しいブリュツヘル將軍に關しては彼が和戰何れの道をとるにしてもその政治的生命はいよゝゝ今回の事件をもつて終焉となるのではないかとの觀測が有力である、然してその理由は

假に彼がスターリンの意に反しシベリア獨立の野望の下に對日開戰を決意するも到底日本軍に對して勝味なく又若し中央が平和的解決を企圖する場合、事件の直接責任者は當然彼である關係から對中央關係一層惡化すべく何れの道を選ぶもブリュツヘル自身としては自殺に等しい結果になる。

といふにある。』

之れは面白い見方で、ブリュツヘルが苦境に陥つたと云ふ見解の方が事實であらう。然し彼れ及び彼れの一派とても、決して、此の位の事で没落するものではない。必ず第二段の方策を立て

るに相違ない。即ちその第二段工作とは滿天下の豫期、或は待望しつゝある『極東軍の獨立』である。只獨立工作より日本挑戦の方が順だから、一應今度の様な事件を起したので、此の次は當然反スターリン的工作にかゝる筈で、彼れの苦境を救ふものはどうしても之れより外はない。

誠に彼れも宿命的に『ルビコンの川』を渡らなくてはならぬのである。

又此の時こそ日本が彼れに誘の氷をかける絶好の機會である。實にブリュッヘルブリュッヘルの苦悶を解消する救の手は日本にある。日本の助力なくして、ブリュッヘルブリュッヘルの獨立は不可能である。彼れは極東に三十餘萬の赤軍を擁してゐるが、身邊は内務人民委員部派遣の監視者に嚴重に監視されてゐるので、果して彼れにどれ丈けの自由な活動力があるか、之れはリュシコフ大將に聞かなくては判らぬ。否、之れは天機洩す可からず、壁を疑ひ、サモワルの口を怖れてゐる露西亞には何處にどんな割れ目があるか判らぬ。所詮ゲベウとブリュッヘルとが握手でもすれば無難作に獨立は實現するが、然らざる限り、一雨、鮮血を降らしてからでないといふ獨立は實現しまい。兎に角ブリュッヘルはスターリンとは何等情實關係もなく、又ソ聯人民委員會議長スイルツオフのスターリン暗殺事件に輕微な關係があつて睨まれて以來、彼れとスターリンとの阻隔は甚しく、それ以後ブリュッヘルの獨立は彼の胸に芽生へて遂に世界的課題になつてゐる。彼としては、進めば勝利か

死、止まれば没落必至とあつては、反スターリン派を糾合して、赤軍三十萬に號令して立つより外あるまい。彼れも兎に角、可成りな獨裁者である。暗々、ゲベウに捕縛、或は暗殺される事はあるまい。茲、漢口陥落の前後に彼れが如何の手を打つか大なる見物である。

處で若し、不幸としてブリュッヘルが獨立し得ないとすると、彼れは早晚没落するし、又赤軍内の彼れの人気、あのモスコ近郊の車輛工場の無教育な日雇工から實力で叩き上げた赤軍隨一の權力者も案外無力であつたと云ふ事になる。又、彼れすら尙且つ然り、彼れの後から來るものも大した實力者ではないと云ふ事になり相である。更に赤軍がスターリンに忠實でもないのに、かくも活動力を缺いてゐては、結局赤軍も足の腐り腰の麻れた軍隊だと云ふ事が出來るだらう。吾々が此れ等の反スターリン派、特に赤軍内の彼れ等に對して頗る齒痒く思ふのは、彼れ等の反スターリン的態度が非常に怯懦であつて、少しも積極性がない事である。又その爲め、彼等はいつでも内密で澤山の同志を募つて、偏に多數の力で立たうとする。それだから、必ず謀が未然に洩れて、空しく一網打盡されるのである。中には自分の處へ火の付くのを徒らに待つてゐるものも澤山ある。之れは誠に愚な事である。

兎に角之れ程迄に反スターリン派が多いのだから、彼れ等の頭株のものが僅かに數人で手兵を

提げて驀然闖入、スターリンを捕虜にしてさへば、何でも出来るのに僅かにそれ丈けの冒險をする處の俊敏尖鋭なる賭心がないのは、矢張り彼等も『露西亞式』である。例へば波蘭土の國境で銃殺された外交官ベルンスタインの鞆の中には五人の將軍、五十名の將校の連名があつたと云ふ。あれ丈けで事を起すには充分であつたのに、愚圖々々してゐたので、今度の様な大肅清が始まつたのである。それ故ブリュッヘルにしても、若し之丈けの決心がありとすれば、彼の身邊を警戒してゐるゲベウを無雜作に掩殺して直に獨立の旗を翻す可しと思ふが、どう云ふものだらうか？

それにゲベウの中にブリュッヘルに内通するものが澤山ある筈である。併し彼れにして餘程の電光石火的行動をしないならば、彼も遂に大な運命を取逃すだらう。機會の女神はいつでも閃電の如き決斷力をもつたもののみの戀人である。彼女は過度に沈思熟考するものと、大勢を糾合して陰謀を企てるが如き懦夫は大嫌らしく見える。誠に三十萬の大兵を擁してゐるブリュッヘルの本心が職工であるか英雄であるかを示す大機會が來てゐる様だ。思へば彼れの未來はスターリンの未來に劣らぬ程興味深いものがある。

(11) 結盟に對する障害

過般、獨逸は中華民國の獨逸軍事顧問ファルケンハウゼン氏以下を漢口から殆ど總て引上げて了つた。トラウトマン大使をも引上げて了つた。之れで獨逸と支那とは關係が打切られたわけで、それ迄は日獨間は奥齒に物が挟まつてゐる様で、誠に煮え切らなかつたと云へる。特に南京の防戦は獨逸人の指導によつて行はれたと云ふに至つては三國攻守同盟が出来る筈はないのである。

だが、愈々引上げて、獨逸の態度も明白にきまつた譯で、此の時をもつて、日獨伊攻守同盟締結の好機會なりと云つて差支へない。凡べて、かう云ふ事には機會を撰ぶ事は必要だが、丁度之れはまだ最近の事なので、誠に此の爲には絶好の機會を提供するものである。それに彼等も日本の戰鬥力を充分に認識したからこそ引上げたのだらうから、之が却つて同盟を促進するだらう。

勿論、日獨各々親英派が存在してゐる。特に何方も其の外務省や財閥の中に巢喰つてゐる。だが日本のそれは頗る微力なもので、云ふにも足らぬ。國論が定まれば、直ちに逼塞する底のものである。思ふに獨逸のそれも左様ではなからうか？

尙外にも日獨伊三國共に夫れ／＼攻守同盟を難んずる小理由があるが、それは何處迄も小理由に止まつて、前述の大利益の前には問題にならぬ。只、今迄、その機縁が動いて來なかつたに過ぎない。それと云ふのは、

- 第一、獨伊兩國は、政府國民共未だ日本の經濟的實力を本當に認識して居ないと云ふ事、
 第二、目下日本が支那と交戦中である事、
 第三、日獨伊に對して三者を盛んに中傷するものゝある事、
 此の三點が主要なるものであらう。日獨國內親英派の問題は之れは御互である。

(12) 吾が經濟的實力を理解せしめよ

三國同盟成立の障害になつてゐる右第一項は、日本が目下百萬の兵を動してゐるので、現在の實力が何處迄低下したかと云ふ事で、之が不安の一つであらう。

又日本の方でも戦争最中に三國同盟は云出し辛い。同時に又、獨伊から見れば、日本が之れからどうなつて行くやら判らない。日本がソ聯同様の弱い國家にでもなつて了つたとしたら、同盟して馬鹿な目に合ひ度くないと云ふのである。蔣介石が望みなき抵抗を繼續してゐるのも、實に斯う云ふ點に空頼みを賭けてゐるからである。

實に之れは、云はず語らずの間に同盟熱に水をかけてゐるものと見られる。
 獨逸や伊太利は日本を好く理解してゐるとは云へ、同文同種の支那すら、日本を理解せざる事

かくの如くであるから、彼れ等白人が日本を理解してゐる程度は知れたものである。
 彼れ等は現在日本の兵力については殆んど何も疑つてはゐなからう。要するに不安に思つてゐるのは日本の經濟力についてである。

先般來、英國は色々の材料を集めて日本經濟の惡宣傳に大童になつてゐる。遂最近でもアムステルダム邊りで盛んに日本が外債の利拂に困るだらうなどと云ふ大放送が行はれた位で、斯う云ふ事が歐洲各國へ相當酷く影響してゐる。

之れについて日本は彼れ等に其の真相を知らせる必要がある。反對列強が盛んに熱心に日本の經濟力の缺陷とやらを吹聴してゐるから、日本としてはそれについて、充分な反駁を加へると共に相當な突込んだ認識と安心を獨伊に與へる必要がある。露西亞や支那などは比較にならぬ偉大な經濟力を示してやる必要がある。銀座や道頓堀を歩いて其の物資の餘裕綽々たる様を好く見させてやるが好い。鐵や何かに就いても腹藏のない生産能力を彼れ等に示してやるが好い。今日の日本の輸出力の底力を見たら彼れ等も日本の經濟的實力を疑る筈がないのだが、尙疑惑を持つものには開放的に説明してやる必要がある。

(13) 結盟は漢口陥落以後

第二項について云へば、日本は漢口を攻略したなら、蒋介石對手に金のかゝる陸上の平押戰術は一時中止す可きである。そうして占領地の境の要點には凡べて皆頑丈なトーチカを築いて、少數の兵をして守らしめると云ふ戰術に出づ可きである。日本の精兵數人で好く、支那兵の四五百人を喰ひ止める事は無雜作な事である。即ち此の少數の精兵の無電連絡による縦横の活用によつて、好く支那兵の支那式逆襲を撃退し得るのである。そうして只管占領地の守を堅くして、秩序を回復し、地歩を築くに努力すべきである。

斯くてあとは、重慶なり、成都なり、昆明なり、何處でも敵のゐる處の都市を爆撃すれば長期抗戰によつて惱むものは彼れ等であつて、此方は少數の兵備のみで、極めて樂な應戰が出来る。此の時必ず向は例の支那式ゲリラ戰で来るから、此方も日本式ゲリラ戰、即ち空爆ゲリラ戰で行くのだ。つまり蔣政府の所在都市の民衆全部を一定の豫告の下に立退かせて、今日よりも、もう少し辛辣なる爆撃を行ふのである。民衆の居ない都市に蒋介石はその大軍を何ヶ月養へるものぞ。之は彼等のゲリラ戰に對する何倍かの報復である。蔣が何處迄逃げて行つても此の辛辣空爆には降参するに相違ない。彼等は盛に日本をゲリラ戰で撃退すると云つてゐるが、それより先に、『空爆ゲリラ戰』に降参するだらう。つまり彼れ等の長期抗戰は日本の長期應戰の前に兜を脱ぐだらう。

らう。

斯くて現地に一定の守備軍を残して、大軍を然る可き地に移駐休養せしめると共に、臨時維新兩政府の内容を充實して行き、國內經濟力の整備と回復とに力を注げば敵は如何ともする事が出来まい。又かうすれば、必ずしも無理に國民政府を降参させる必要もなからう。地方的國民政府などは無視して鋼鐵の足取りで、日滿支經濟ブロックの確立に邁進す可きである。

實に日本の如く澤山の敵を控へてゐる場合には、戰略の妙味は或る程度迄戰つたら、寧ろ英氣を抑へて偏へに第二撃の爲めに滿を持する處にあるのだ。

即ち未だ疲れざるの國力を擁し乍ら、ソ聯、英佛に對して、
「さあ、支那から手を引け。然らずんば一刀兩斷するぞ」

と威かせば、今日ならば、必ず彼れ等は慄然として手を引く筈である。誠に日本は、已でに之れを南京攻略と同時に、爲す可かりし筈であつたのである。即ち日本が漢口で進撃を止めるのは戰を止める爲ではなくて、第二敵を討つ爲めの準備に過ぎない。勿論、茲で露英佛が肯かなければ決然として彼等を討つのである。誠に之れは漢口攻略以後直ちに爲す可き手段である。

然るに吾が當局の爲す處は、何者かに操られて、その態度極めて軟弱不徹底、遂に蔣政府をし

て、皇軍を怖れ乍らも、日本政府を侮り、日本を見縊ると云ふ態度を取らしめて、斯くて我れから求めて、彼等に長期抗戦の覺悟を堅からしめるの結果となつたのは實に遺憾千萬であるが、今日からでも尙遲しとしない。よろしく北方を一喝するか、南方を一睨するか、兎に角兩者を順々に威嚇脅迫して支那から手を引かしむ可きで、それには、一反中支の陣形を整頓しなくてはならない。現在の日本の態勢は運動術語で云へば「伸び體」「體伸び」と云ふ部類に屬す可きもので、ソ聯や英佛を叩くには少しく陣容の建直しが必要である。

處が今頃「日英會談」などと馬鹿げた事をやつてゐる様ではこんな肚藝は逆も出來まい。だが、尙樂な道がある。之れは萬一、ソ聯等が日本の威嚇に屈しなかつたとした時は戦はなく、

てはならぬ。處が半獨立態勢にあるブリュッセルを叩くのは現在不利益不經濟だと判る。英佛を叩くにも日本一ヶ國で叩いたのでは後が五月蠅く煩はしいのである。それなら茲で彼れ等と戦はずに、三國同盟を實現さすべきであらう。之れは神經衰弱の蔣介石を氣死せしむる事、平押戰術の比ではない。瘋癲國家のソ聯や中風國家の英國を支那から退却せしむる最大の秘策である。獨逸は日本が早くその共同作戰に出る爲めに、支那との戦を中止する様に願つてゐるので、或

は日本が漢口戦で、守勢に出たなら喜んで、彼れの方から同盟を持ち掛けるかもしれない。

そう云ふ考へを裏付けるものとして「讀賣新聞」、八月十二日夕刊に「獨伊の軍事協定急速に實現の機運」なるベルリン同社特電がある。即ち、

『傳へらるゝところによれば日、獨、共協定を、軍事同盟にまで強化すべしとする、活潑なる運動がドイツ國民の間に盛んに提唱せられてゐる、折から一方、獨伊間に秘密軍事協定問題が進められこの方は急速に具體化の一途を辿りつゝある模様で、最近ゲーリング空相の招待によつてベルリンを訪問したリビア總督イタロ・バルボ將軍のドイツ軍部との直接交渉は右の機運に著しい拍車を加へたものと傳へられ當地イタリア大使館でもこの消息に對し何等否定的態度を取つてゐない状態である。』

讀賣新聞は今迄盛んに防共協定を傷ける様な記事や文章計り出してゐたが、急に同社丈けがこんな報道を時々するのは頗る奇妙だが、兎に角吾々にとつては眞に歓迎に耐えない報道である。

(14) 功利的結盟を排す

此の結盟障害の内の第三項の内容は英國と猶太財閥がその宏大なる觸手を動かして盛んに日獨伊の間を中傷してゐる點に關してゐるが、特に日本に就いては、

『黃禍日本はスエズ運河以東を日本の勢力範圍として、白人全部を茲から逐拂ふ企圖である』、

と云ふ種類のもので、之れ等の内でも之れが最も重大なる中傷である。勿論、之れは根據のない事ではない。日本人の中にさへ左様なつまらぬ事を考へてゐる人がある様である。然し之れは皇道日本の考へる考へ方ではなくして、搾取日本の考へる考へ方で、吾々は思想的に大反對である。先づ之れは八紘を道義的の一字一家となす底の考へ方に矛盾するからである。更に政策的にも愚劣淺薄な思想である。それに現在の土耳其を無視した不謹慎な暴言でもある。

日本は苟も道義日本の意識に立つ限り、日本と握手して此の驚天動地の大事業をなさむとする獨伊兩國は日本の親邦であつて、共に死生の間を出入する處の結盟國家である。彼れらと日本とは永久の盟友である。そういふ處が飲込めれば皮膚の黄白、勢力範圍の多少を問ふの要はない。日本人の道義精神に觸れるものは忽ち黃禍思想や分捕精神を捨てるだらう。

或は獨伊兩國は「持たざる國」の意識から日本と手を握るかもしれぬ。然し之れは『海賊心理』『山賊心理』である。或はプロレタリア國家の霸道である。國家的マルクス主義である。

斯様な唯物心理で互ひに結合する時に、合せ物は離れ物、即ち共敵打倒の曉に必ず第二の衝突を發生する。日本人の中にも三國同盟を左様な不見識な意味で、考へてゐるものが澤山ある。又斯ふいふ氣持だから黃禍思想が生れるのである。

だが道義日本の同盟は左様な淺薄なものではなく、眞に精神的に忠實な同盟でなくてはならぬ。意氣相感じ、相投合した血盟でなくてはならぬ。共同の敵が倒さるれば、直ちに利害衝突、忽ち分裂し去るが如き同盟であつてはならぬ。洋の東西にあつて何處迄も長く親交友誼をつゞける處の半永遠の同盟でなくてはならぬ。

之れが本當の日本の同盟、皇道的結盟である。苟も英雄日本と世界の兩雄ヒットラー、ムッソリーニとが作る結盟だけは、少くも在來の傳統を破つた新しい精神的な英雄的なものでなくてはならない。

かつて日英同盟の折は日本にそう云ふ高調せられたる皇道意識がなかつた爲め、あの同盟は極めて低調なもので、遂に不體裁耻づ可き末路を遂げたが、今度の三國同盟は左様な不見識なものであつてはならぬ。たとへ利害の一致に始まつても、一度び握手するや、それは必ず三民族の英雄的道義的血盟でなくてはならぬ。従つて半永久的結盟でなくてはならぬ。義兄弟や夫婦の契に年限を切る様なものはない。年限を切る同盟は西洋式唯物主義で、左様な低調なものは皇道義盟に反してゐる。従つて其の誓約は、前例のない外交的言辭を必要とする。即ち

『日獨伊三國は精神的、文化的、物質的、經濟的に結盟す。又その國家的利益を超越して共同防

衛の爲めに結盟す。即ち其の一国が事情の如何に拘らず、他國と事實上の戦争關係に入りたる時は直ちに他の二國も結盟國の對手に對して戦争關係に入り、同時にその緩急に於いて結盟國を軍事的に救援、或はその敵國を攻撃する事を約す。又戦争の遂行中、各自の國民が同盟の是非利害を論ずるを許さず。此の誓盟は無制限に繼續するものと爲す。

と云ふ極めて簡單なる約束で澤山である。之れは精神的間接的に不戰條約や、九ヶ國條約にも矛盾するし、其の他色々の條的に矛盾し、或は、せむとするので、結盟三國は之等は勿論、ヴェルサイユ條約、華府條約等々を根こそぎ廢棄、或は清算して了ふ可きである。

當然之れに三國經濟同盟條を付加す可きで之れの一目的は猶太財閥打倒にあるが、此の方は細目は必ずしも急ぎ必要はない。他日の研究題目としても好いが、功利的打算的結盟でなく、一つの皇道經濟主義による三國義盟を結ばうと云ふのだから非常に簡單なものが出来たらう。已で「金經濟廢棄防共經濟ブロック」と云ふ事は二三の識者が唱へてゐるが、軍事的攻守同盟に伴つた經濟ブロックでなくては本當のブロックは成立しないと考へるものである。單なる軍事同盟は、基礎薄弱で將來の黃白人種戰を妨げるには文化經濟同盟迄行かねばならぬ。そうして之れを三民族が、莊嚴なる宣言として世界に向つて發表するのである。

今日三國同盟の熱が動かないのは互に其の心の中に自我主義や功利主義、唯物主義、或は黃禍主義があるからである。自己の心を他人の大腹中に置く底の偉大なる精神がないからである。又その缺陷を狙つて、英佛猶太財閥等が百方中傷譏誣を逞くするからである。かくて獨伊は日本の發展を喜ばず、又伊太利は獨逸の塊國合併、チエツコ侵入を喜ばず等々色々事實無根の中傷を飛ばすのである。併し獨伊二國は己れの盟邦が之れ以上の發展をしなければ己れ自身が他日英佛ソ聯の連合軍に打倒される日のある事を考へれば之等の中傷風説が事實無根なのが判る筈である。兎に角日本としてはもう疾うの前から東洋に於ける色々利權を此の兩國に與へて居なくてはならぬのに、局量の小さい連中が、そう云ふ態度に出でぬ爲に、一向獨伊兩國の態度が煮へ切らぬのである。日本は獨伊兩國に無報償で利權を與へなくてはならぬ。只日本に對する口先きの好意丈けでも、それに利權をもつて酬ひなくてはならぬ。況んや口先きのみならず。貿易に於いて獨逸の如きは日支事變のため大なる犠牲を捧げてゐるではないか。現在獨伊は今何も攻略してゐない。無るに日本は盛んに攻略してゐるので、その土地の利權を氣前好く兩盟邦に與ふ可きである。或は英佛のそれを奪ひ取つて、打算を離れて友邦に與ふ可きである。日本の當局にその位の大度量がなくば、此の様な大戦争を起すなと云ひ度い。

實に之れが三國同盟の下地になる。之れで獨伊兩國は嫌でも應でも三國同盟の軌道へ入つて來るのである。然るに日本獨りで門戸開放の空題目を唱へ乍ら、少しも兩國に大利權を與へぬ様では防共協定の前途たるや知れたものである。

戰地に於いて、獨伊人にして日本を笠に着て色々の事を働くものがあると聞く。然し之れは吾が國民に許さぬ事なら許す必要はない。若しわが國民に許してゐる事なら、彼れ等にも許さなくてはならぬ。日本には此の兩國人を自國人と同一視出來ない狹量なる外交官等がある。之れは悲しむ可き事で、若しそうすると、之れ等の獨伊人は日本を惡し様に、故國に報道するかも知れぬ。それが日本の人氣を惡くすると云ふ事になるらしい。

(15) 三國同盟の勢力範圍

日本と獨伊とは隔在してゐるので、利權の衝突する事はない。皇道日本がスエズ運河邊りで、歐洲の盟邦と私利を争ふ様な馬鹿な事は絶対に有り得ぬ。日本がスエズ運河で獨伊と争ふ様な時はもう日本は八紘八極を一字と爲す底の道德的理想を確立してゐる。舊血盟の邦と下らぬ物質的な小さい争などはしない積りである。

何分、日本がそう云ふ氣持ちだから、獨伊兩國もあの狭い歐洲で互に競ふ事は止めて貰ひ度い。現在獨塊合併によつて獨逸は甚しく兵力に於いて強くなつたが、それでも地の利に於いて伊太利に及ばぬ。それ故、私を見る處では兩者伯仲の間にあると思ふ。假りにその時宜によつて、一方が勢力を得たからとて直ぐに一方が之れを嫉む(英國の中傷に依れば)様な小さい心を捨て、本當の犠牲的な忘我的な血盟の國になつて貰ひ度い。

兩者の争ふ心配の地はバルカン半島にある。茲で兩者が英雄的襟度をもつて勢力範圍を定めて、獨は北方に、伊は南方に雄視すべく、獨がウラル山脈迄の露領を其の勢力範圍とするならば、伊は英佛の地中海沿岸植民地からバレスチナを其の範圍となして、兩者の勢力均衡を保つたら好からうと思ふ。

兎に角、地中海は伊太利の海となる可きで、その沿岸大部は當然伊太利の勢力範圍に歸す可きものである。「東洋」と云ふ抽象的な名稱で、日伊の勢力範圍などを極めるのは無理である。「東洋」なる空疎な地理的概念に欺かれて『スエズ運河を黃白人種の境となす』などと馬鹿げた事を日本人は云つてはならぬ。誠にバレスチナに於ける現在の伊太利の努力を尊重せねばならぬ。スエズ運河は當然伊太利が所有す可きものである。

更に英佛露を打倒した時の勢力範囲の協定が問題である。私案によれば支那は吾が保護國とし、印度アフガニスタン、波斯、アラビヤ等は獨立せしむべく、それより以東の英佛領は凡て日本の保護國と爲し、以西は獨伊が分割す可く、歐羅巴ロシアを獨逸に讓つて、其の指導區域と爲して好いではないか。兎に角三國の勢力範囲はウラル山、ウラル川、裏海、チグリス河等が自然の區劃になるのかも知れない。

人の噂ではムツソリーニ氏は印度を半分欲しがつてゐるなどと云つてゐるが、欲しけりややつても好いではないか。皇道日本は有無相通八紘を一字となす底の道德樹立が目的で、一定の土地を自分の領土として必ずどうと云ふわけではないから、そんな事は問題にならない。一定の土地が、理想的には、印度や、波斯、アフガニスタンを獨立させて東西の緩衝地帯とす可きであらう。何でも山賊の分捕分配の如く分け去る事によつて再び紛争に陥り、更に之等の三國は分捕つたものを支配し消化する事が出来なくなると、再び世界の大禍亂に陥るだらう。そう云ふ霸道的不幸を避ける爲めにも日本は皇道主義によつて獨伊兩國を導いて行かねばならぬ。

私の豫感では印度その他の國は果して獨立して行く力があるかどうか疑問であるが、兎に角一應彼れ等に獨立を許して見る事は皇道日本の建前から見ても當然である。

(16) 空前の道義結盟

又之れ丈けの覺悟があれば、三國同盟は必ず成立するだらう。兎に角、日本は大ゲルマン國と大ローマ國との成立の爲めに、大なる誠意を捧げなくてはならぬ。日本は之れ等の國が古代の如き偉大な國家になる事を美しい大きな温い心をもつて歓迎し祝福する丈けの廣い心を持たねばならぬ。そして又、彼れ等の側でも、東方に偉大なる皇道國家の興隆を心から歓迎して貰ひ度い。かくて、此の三國同盟は歴史あつて以來、前例のない美しい大義盟となるであらう。

それ故どうしても、世界の根本的解決の鍵は日獨伊攻守同盟にある。新しき世界は之れから明けるのだ。もうこれより以上の活策は存在しないのである。又日本の難局解決の鍵も茲にかゝつてゐる。然るに防共協定成立の頃は先覺者が盛んに之れを叫んだが、不幸時期尙早なりし爲めか遂に輿論にならなかつた。その内に英佛ソ聯猶太財閥の中傷政策が美ン事功を奏して、日本の國內にも之れ等の運動が一時沈衰したのは誠に遺憾である。新聞の中には絶えず防共協定を傷けむとしてゐるものもあるやに見えた。

だが、今日程三國同盟が必要な時はないのである。之れは日本にとつて必要な許りでなく獨伊

兩國にとつても必要なのである。獨伊兩國は今相當な財政的窮乏に陥つてゐる。然も英米は非常な富を擁してゐる。財政的見地に於ては、到底吾等は彼等の敵ではないのである。然も英國は衆知の如く超大絶大なる海軍計畫に着手して三四年の内に完成せむとしてゐる。伊太利も之に對抗せむとして戦備を急いでゐるが、此の點で英國に及ぶものではないのである。

然らば獨伊兩國としては徒らに英國の大軍備完成を待つて居られない實狀にあるのだ。

誠に今日程三國同盟の急はないのである。然も今日、決然立つて此の大運動を起すものが居ないのは非常に遺憾である。

日本は茲で大汗になつて東奔西走戦つてゐるのに、露英佛が晝寝をし、巨大な金儲けをし乍ら、巧みに蔣介石を操つて日本と戦はしてゐるのは實に皮肉な現象で、此の大傀儡師群をして、慄然として恐れをなさしむる底の大活計は眞に三國同盟より外はない。

之れに心付かぬ人々は皆「鹿逐ふ獵師山を見ず」の亞流である。實は支那事變の始まる前に三國同盟を結ぶべかりし筈である。誠に三國同盟こそは垂拱して支露英佛米猶を打倒するの大活策である。一約して世界を三分するの大秘計である。思ふに三國同盟一度び成るの日、世界一切の事吾等三國の意志の儘であらう。

若し、日本と獨伊の間に秘密の攻守同盟が結ばれてゐるなら問題は無い。然し凡べての情勢から見て今日それを信するものがない。

と云ふわけの第一は、そう云ふ密約があるなら、それは秘密にするよりも公開して、その公然たる威力によつて、戦はずして世界を征服した方が有利だからである。その威力によつて歐洲に於いて、東洋に於いても凡べてを力押しに押して行けるのである。即ちソ聯がかく挑發して來る以上、日本は直ちに之に應戦しても問題はない。廣東の攻略にしても無雜作に敢行出来るのである。兎に角之等の點から見ても、三國に攻守同盟が存在しない事は公然たる事實で、之れは無遠慮に公言して差聞へなからう。その外に證據はいくらでもある。

嘗つて私は防共協定の背後には必ず軍事同盟が隠れてゐると計り思つてゐたので、餘り熱心に此の事を云はなかつた。處がその後の経過に徴して左様なものゝ存在せぬ事が判つたので、敢えて今日之れを號呼する次第である。先年三國攻守同盟を叫んだ人々も今こそ決然立つて政府を鞭撻す可きである。

(17) 宇垣外相退却す可し

今日。は。戦争。と共に、本。當。に。痛。切。に。外。交。に。よ。つ。て。勝。利。を。得。可。き。時。とな。つ。た。の。で。あ。る。實。に。今。日。程。大。外。交。が。要。求。さ。れ。て。居。る。時。は。な。い。活。外。交。の。必。要。な。る。事、蓋。し。空。前。で。あ。る。或。は。絶。後。で。あ。る。か。も。知。れ。な。い。今。日。の。大。難。局。は。東。西。連。衡。の。大。巨。腕。を。待。つ。や。實。に。切。實。な。る。も。の。が。あ。る。

勿論日本は支那を破り、ロシアを破り、東洋で英佛を破る事は出来る。

だが、その後で、日本は困憊するだらう。然も東洋で敗られた英佛は物質的には必しも困憊せず、新たに露支米と連合して、此の困憊した日本に對して、色々面倒な復讐を企てるに相違ない。その時に吾々は草の葉木の根を食つても戦ふ精神は持つてゐる。

だが、彼れ等の經濟戰、黄金戰に對してだけは、日本と雖も戦争の様に樂には勝てないのである。それ處か負ける可能性が多分にある。

然らば、此時他に坦々たる活道があるとすれば、吾れから好んで、そんな難局を求める必要はない。又そう云ふ結果になつては、此の廣漠たる占領地の保全開拓にも困難である。それでは結局、「勝利の爲めの勝利、その結果は零」と云ふ事になる。そうなつては大陸戦の人柱となつた忠勇なる將士にも相濟まない。乃で、吾々は今迄閉店休業をしてゐた外務省を大改革して、
日。本。的。勝。利。外。交。

つまり、皇軍の戦争に劣らぬ様な日本精神に充ちた本當の大外交を行つて、暫らく、皇軍の戦闘力を休ませなくては、眞に乾坤掀翻の大活躍が出来ないのである。

それには、外務省に巢食つてゐる親英派、現状維持派、軟派を皆放逐し、革新組を其の要路に据え、日本精神をもつた大外交家を外務大臣にして、至急三國攻守同盟を締結しなくてはならぬ。當面、日英協定の成立を妨げなくてはならぬ。此の協定の如きは悲しむ可き結果となるであらう。即ち先づその大目的の爲めには日和見主義の正體を現し來つた方便主義者、宇垣外相を迅速早急に退去せしめて、その後へ荒木文相に轉じて貰つて、そうして外務省内革新組の指導者白鳥敏夫氏を次官に拔擢して、此の曠古の大外交を行はしめなくてはならない。荒木將軍なら旬日にして外務省の大改革を斷行する。五相會議で軟派を指導してくれる。それ處か數ヶ月にして三國同盟を締結してくれるだらう。

獨逸人でも伊太利人でも、合言葉の様に、

「ヒットラー、ムツソリーニ、アラキ」

と云ふ事を云つてゐる。支那の戦線で獨伊人が日本人と手を握る時、言葉が通じないので、多くはそう云ふ相である。之れ文だけでも三國軍事同盟締結の當局者はどうしても荒木將軍を措いて、

適當な人物は居ない。日獨伊攻守同盟はどうしても「荒木外相」でなくては出来ない。これは宿命である如く見える。

更に日本は三國同盟を實現すると共に、非常時革新政治を行はなくてはならぬ。それには、至公至正、盡忠報國の人たるは勿論、思想家、理想家、精神家にして、同時に熱烈なる信念の人でなくてはならぬ。

そふ云ふ偉大な責任の地位に坐す可き人は日本にそう澤山は居ない。もしそう云ふ人物が一人でもゐたら、輿論は熱心に立つて彼れを支持するのが此の非常時日本の大難局を切り抜ける所以であらう。

筆者は荒木將軍が果して三國同盟に付いてどんな事を考へてゐるか知らぬ。或は專管の事一杯で、こんな事を自分の問題としては夢にも思つてゐないかも知れないが、其の平素の思想から云つて、かう思ふに相違ない。國民は斯う云ふ人物を支持して日本の偉大なる理想を實現する爲めに努力しなくてはならないのである。

然らば荒木文相のやりかけた大學問題はどうか？ 之れは荒木將軍にとつて誠に残り惜しいに相違ないが、大學の事位は何も荒木將軍を煩さなくても、外に誰れでも出来る。文句を云ふ

教授等は片ツ端から放逐して子へばよろしい。大學の不逞亡國教授位が始末出来なくて、此の曠古の大戦争が出来るものではない。荒木文相の皇道主義、國體主義、大義名分主義が大學の兇逆國賊思想に敗れる様な事があれば、之れは日本が張鼓峰で敗れた以上の深刻なる精神的敗北である。吾々は日本精神の威力をもつて、此の大學の邪惡思想、賣國思想を徹底的に彈壓し、場合によつては大學を閉鎖するの大英斷に出づるの覺悟がなくてはならぬ。

兎に角宇垣外相には誠に御氣の毒である。然し皆外相が年來時き來り、將た現在爲しつゝある處のものから斯う云ふ結論が生れて來るのである。現在の問題としても、外相の外交はクレイグ大使との會談と云ひ、其の外務省改革を回避してゐる態度と云ひ、凡べて、吾々の承認し難き外交と見做して差聞へない。即ちそこから私の苛辣な裁斷が生れるので、誠に此の老人外相には御氣の毒である。

宇垣外相を退却させるにはまづ、民間右翼が立たなくてはならぬ。

軍部に説かなくてはならぬ。同時に内部から外務省内革新組が外相を彈劾すれば、宇垣外相は無雜作に退去させる事が出来る。革新組は直ぐに宇垣彈劾に躍起するに相違ない。彼れ等は宇垣の親英外交、灰色外交に憤懣を禁じ得ないのだから喜んで立つに相違ない。湯淺氏に聲援されて

再度の首相になつた積で有頂天になつたと雑誌に書かれた廣田氏が革新組に弾劾されて外務省を去ると共に、後繼首相絶望となつた如き愚轍を宇垣氏が踏まねばならぬと思ふと氣の毒だが誠に之れより外に道がないのである。

私がかう云ふ事を云ふのは荒木、白鳥などと云ふ人々には大迷惑に相違ない。否、私にも迷惑ならずとしない。然し國家の爲めに、非常時日本の爲めには斯う云ふより外ないのである。誠に斯ふ叫ぶより外はないのである。個人の迷惑などは云つて居られない。筆者は之等の人々と何の關係も無い。又好くも知らぬ。それだから骨に推薦出来るので、此點誤解の無い様に願ひ度い。本來吾々には自づから廟堂に立つて國政變理の大任を拜する丈けの幸運がない。左れば在野、一管の筆を揮つて處士の自由横議を行ひ、以つて國家に貢献せむとする。即ち國家にとつて尤も理想的也と信ずる大策を説き、更に人物を自由に月旦し誠實に鑑識して、その尤も非常時日本に貢献するものありと信ずる人あらば、敢へて之を天下に推薦するのが國家に奉公する者の至道なりと信ずるものである。又之こそは文章報國の士の大理想ではないか。偏に威武に屈せず、五斗米に阿らず、頂天立地、獨夫獨筆、何者にも關係せず、何人にも負縁せず、天空淵地、快馬一鞭、只管自己の所信を赤裸々に傾倒する事によつて始めて天下の正論を作る事が出来る。若しそれか

くの如き人物にして三人あれば輿論を作る事が出来る。否、一人たりとも可也。彼れ一人が敢然として説けば必ず、正論の正論たる威力を發揮する事が出来る。況んや天下操觚の士、凡べてが筆を黄金に繋かず、心を阿賂に繋ぐに非ずんば一瞬にして正論は確立し、眞人達人が廟堂に現れるのである。之れに反して何等の理想なく、何等の精神なく、徒に黄金によつて天下を買収して、小さき地獄の土産になさむとするが如き魑魅魍魎の輩にして志を得るに至らば、必ずや國家は大なる不幸の淵に沈淪し去るのである。即ち我々は、斷々乎として、斯くの如き輩の擡頭を妨げねばならない。

兎に角、當世紀に於ける最大の指標は日獨伊三國攻守同盟である。之れは打算の時代ではない。宿命論觀の時代である。天命奉承の時代である。明年が今年に續くが如く然く絶對的大必然である。斯くて三國內に於いて、此の大運命に逆行するの徒は必ず打倒さる可き必然下にある。

戦はずしてソ聯を倒す道(尾)

月刊雜誌

喫茶街を中心とした

スマートな流行雜誌

喫茶街

菊判總アートの豪華版

定價三十錢

發行所 亞細亞出版社 振替東京七二五七番

戦はずしてソ聯を倒す道 No. 103

定價十錢

昭和十三年九月九日印刷
昭和十三年九月十二日發行

著述者 古谷榮一

編輯兼發行者 設樂邦太郎

印刷所 大森印刷所
東京市小石川區南ヶ谷町一四六

東京市下谷區車坂町八九番地

發行所 亞細亞出版社

電話下谷(83)四七六七番
振替東京七一、五二七番

月刊『喫茶街』

大阪市北區堂島上二ノ二五
京阪神特約店 新正堂書店

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會) 啓徳社

全圖各驛店・ホム・街頭新聞・スダ・有名書店にあり



亞細亞出版社